# ばんえい競馬の変遷

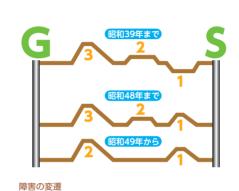
夫により、コースから騎手の服装まで次第に進化を延長でしたが、レースを重ねる中、関係者の創意工開催初期のばんえい競馬は粗削りなお祭りばん馬の 遂げていきました。

## 障害の配置も紆余曲折 U字型から直線コースへ

少しずつ競技としての形を整え 三十年の間に改善に改善を重ね、 ていきます。 ばんえい競馬は発足から約

型 五〇センチ、幅約三メー 障害」と呼ばれる深さ三〇から 外側のコースの馬には不利とな 差し掛かり、各馬、先を争って内 越えるとすぐに U 字のターンに が設けられていました。この溝を べるという利点がありましたが れはお祭りばん馬の慣例になら しかも旭川と北見のコースには、 ンコースを採用していました。こ もので、 コースは当初、 ぐに隣のスター U 字型とも呼ばれるオ しばしば混乱を招きました。 トから間もない地点に「濠 ゴ ルした後、 四市ともに馬蹄 トラインに運 ・トルの溝 そりを

> 昭和三十八年にまず旭川が、昭和 障害があったのです。 U字型コー を過ぎると、高さ一・六メー 四十三年には残りの三市も直線 スは何かと問題が多かったため、 の土堤に砂を深々と盛った第三 の「砂障害」です。 て難路を設けました。これが後 が掛かると危険なので、 側に殺到します。ここでスピード さらにこれ 砂を盛っ



が続き、さらに高さ一・六メ 高さ五〇センチ、 相変わらず三カ所のまま。高さ ルもの砂を敷き詰めた第二障害 スに統一しました。ただし障害は ルの第三障害が控えていました。 : 三 メ トルのセパレ トルの第一障害の後、 長さ二〇メー トコー

昭和四十九年には、馬にこと

昭和35年のレース風景。そりはまだ木製、重量物はコンクリート製。騎手が座ったまま馬を操っているのは 立ち乗りが禁止されていたため。(写真/荘田喜與志) 最初はお祭りばん馬で馴染み

障害を越える独特のセパ こうして現在のような、 の判断から中間の砂障害を廃止。 さら苦闘を強いる必要はない コースが誕生しました。 二つの

### 鉄製のそりに統一 持ち寄りだったそりを

して造ることになりました。 らも物言いがつき、主催者が統一 公正な勝負にならない」と観客か りは不利になります。「これでは たかどうかで決まるので長いそ 長さも重さもまちまち。 持ち寄りか、 りの後ろ端がゴール地点を過ぎ ら借り上げたものでした。 ばんえい草創期、そりは騎手の または地元農家か 勝敗はそ 当然、

が使われるようになり、 昭和四十六年からは鉄製のそり 木材の確保が難しくなったため、 する恐れもありました。 りと重くなり、 のある木製の荷そりが使われて 改良が重ねられました。 いましたが、雨に濡れるとずっし 古くなると変形 その後も さらに

# 鉄製へと進化した重量物わら袋からコンクリート ト製

には、 ともに欠損してくることが判明 場の砂を詰めて重さを測ったの 全鋼鉄製へと進化しました。 試行錯誤の末、昭和五十一年には れなら大丈夫と思いきや経年と ト製のものに変更されました。こ ると重くなるため、 木製のそりと同じように雨が降 を詰めたカマスは損傷しやすく、 が重量物の始まりです。ですが砂 製の袋「カマス」を持ち寄り、 のでした。穀類などを入れるわら そりの上にのせる重量物(おも 取っ手のついたコンクリ 当初は極めて原始的なも 昭和三十五年

野暮。そこで工夫に工夫を重ね、 現在の重量物の原形となるスタ を納め、さらにナットで固定す そりに箱型重量物をナット るようになりました。こうして、 して固定し、 いましたが、それではあまりにも 員がロープでそりに縛りつけて イルが少しずつできていったの 重量物は当初、騎手やきゅう務 その箱の中に重量物

# 立ち乗り禁止の時代も馬を操る技術も変遷

た。 「立ち乗り禁止」が解除されまし ことも理解され、 れば馬の全能力を引き出せない ぎになることも。 審判の決定に不満が爆発し、大騒 「立った」「いや立っていない」 た時期もありました。 さらに立ち乗りが禁止されて ため、この跳び上がりは禁止に。 うです。危険な上に見た目も悪い ら跳び上がる騎手も多かったそ 少しでも重量を軽くしようと、自 操っていました。障害を登る時は 積み上げたカマスの上から馬を 初期の頃、騎手は立ち乗りで、 昭和三十八年に 立ち追いでなけ ところが、 ح

留まり、残酷な行為には当たらな とで馬の条件反射を刺激するに したのは、打つ力が制限されるこ ました。「手綱の余った部分」と 能力を引き出すために解除さ 上されていましたが、やはり馬のら。それまでは馬を打つことは禁 ようになったのは、昭和四十年 いとの判断からでした。 手綱の余った部分で馬を打 れ か つ



何かと問題の多かった初期のU字型コース。(写真/中西関松)

33

# 騎手の統一ユニフォ 鉢巻きと白シャツで始まった

年からのことです

34

馬しか手本がなかったのですか でばらばらでした。 馬ズボンに長靴あり、 に地下足袋ありと、 ンニングシャツあり。 鉢巻き姿。シャツはとりあえ 白色で揃えたものの、半袖あ 初の公式ばんえい競馬に姿を 無理もありません。 長袖あり、 ワイシャツあり、 全員がねじ お祭りばん 服装はてん 半ズボン 下も乗

服は濃いグリ 桃の八色とし、馬に着けるゼッケ 順に白、黒、赤、青、黄、緑、橙 馬と同様、騎手帽の色を一枠から にし、騎手個人の服色が決まりま と同じように騎手の服装を登録制 に。昭和四十四年には、平地競馬 呼ばれる縞模様の帽子に統一され 昭和三十三年には「す 二十四年からは、 するようになったのは、昭和五十 した。さらに翌年には、全国の競 かわりに運動帽、 .も、騎手の帽子の色と統一され ケンを着けることになりました した。騎手がヘルメット さすがに公営となった昭和 ーンの半袖シャツ 白シャツに胸ゼ ねじり鉢巻きの いか帽」と -を着用

> ました。騎手重量はその後何度か な重量の鉄片を入れるようになり は現在のような重量カバンに必要 見た目が悪く、昭和四十五年から うです。その後、南京袋にひもを 砂や石を入れて、体重を補ったそ 体重の軽い騎手は布袋や風呂敷に 改正され、現在は七十七キロとな つけたものに統一されましたが、 重量を一律七十五キロに決めると、 た。公営四年目の昭和二十八年、 の重量には制限がありませんでし ばんえい競馬の発足当時、騎手

# スタートは赤旗で合図かつては人馬別々の入場

っています。

を背に乗せるのは一般的ではなか 車をひくよう調教されており、 搬に使われる馬たちは農耕具や荷 馬場に出る時は、馬はきゅう務員 ったためです。 していました。これは、農耕や運 にひかれて、騎手とは別々に入場 下見所(パドック) か

なったのは昭和四十五年から。 けていません。裸馬に等し んえいの競走馬は鞍もあぶみも 騎手が騎乗して入場するように い巨大 ば

#### 可欠な公正が保たれるようになり が飛躍的に高まり、公営競技に不 年にはVTRパトロー れました。これにより審判の 全体を記録するため、昭和四十四 また、ゴールだけでなくレ ルが導入さ 精度

あり、審判委員がそこからゴール

に「六角堂」と呼ばれる審判台が 眼で行われていました。ゴール前

着順判定は、かつてはすべて肉

スリット

カメラやVTR

審判の公正を躍進させた

うになっています。

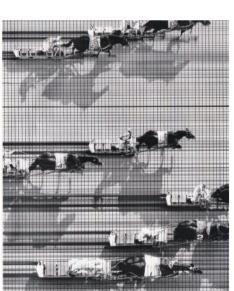
長い写真に収めることができるよ

ルの瞬間の一瞬一瞬を、

一枚の

で巻きながら撮影することで、ゴ 間)があり、フィルムを一定速度 フィルムの間にスリット(細い隙

インする馬の順位を判定していま



着順判定に欠かせないスリットカメラの写真。 現在はモノクロからカラーになっている。



面の対面となる側に、カメラを備 年までには、四市ともスタンド正 撮影する方式を採用。昭和四十三

えた対面タワーが設けられました。

使用される着順判定写真機は、

されました。電動式ゲー

トの導入

各馬一斉に飛び出す豪快なスター によってこれらの問題も解消され

-が実現したのです。

がいたため、公正上の問題が指摘

ルも走ったりする人

平地競馬と同様、スリッ

-カメラ

と呼ばれる特殊なもの。

レンズと

の尻を叩いたり、

馬を引っ張って

ろがこの時、勝たせたい一心で馬 られるや否や馬を放します。とこ が一人つき、スター

トの赤旗が振

ました。馬一頭につききゅう務員

が赤旗を振って合図を出してい

ためスタンドと向かいの両側から い見えないこともあります。その そりの後ろ端が馬体に隠れてしま ってゴールすると、勝敗を決める 採用されましたが、馬が一団とな 和三十八年からは着順判定写真が

トが登場するまで、スタータ

四十六年に電動式スターティング

颯爽と入場する光景は、この時か なばん馬に騎手が軽々と跳び乗り

平地競馬に遅れること十年、昭

らお目見えしたのです。

スのスター

昭和



現在の対面タワー。



左に見えるのが、かつての審判台「六角堂」。(写真/中西関松)



白シャツにゼッケンを着けた騎手たち。初期の頃は現在よりも出走馬が多く、このレースでは15頭立てだったことが分かる。(写真/中西関松)

35